

多可町所在

# 横屋・宮ノ前 遺跡

(一) 加美八千代線県単独道路改良事業に伴う発掘調査

2011(平成23)年12月

兵庫県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県多可郡多可町八千代区に所在する、横屋・宮ノ前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、(一)加美八千代線県単独道路改良事業に伴い、兵庫県北播磨県民局加東土木事務所多可事業所の委託により、兵庫県教育委員会が2009(平成21)年度に実施した。また整理業務は、同事務所の委託により、2011(平成23)年度に、兵庫県立考古博物館において実施した。
3. 本発掘調査は、兵庫県立考古博物館の久保弘幸・上田健太郎が担当した。本発掘調査に先立って実施した分布調査、確認調査の概要については、本文中に記載している。
4. 整理事業は久保が担当した。なお整理事業に携わった職員については、本文中に記載している。
5. 本書は久保が執筆し、あわせて全体の編集をおこなった。
6. 本発掘調査および本書に関連する図面・写真・出土遺物は、すべて兵庫県立考古博物館において保管している。
7. 本発掘調査の期間、および本書の執筆・編集にあたっては、下記の方々よりご指導を頂戴した。記して謝意を表したい(順不同・敬称略)  
宮原文隆(多可町教育委員会)・安平勝利(多可町教育委員会)

### 凡例

1. 本書で示した標高は、東京湾平均海水準を用いている。
2. 本書中の図で示した方位は、調査地点における磁北による。
3. 本書中で用いた地層および土器の色調の記号番号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によっている。
4. 掘図中で用いた遺構の略称は、下記のとおりである。

P : 柱穴 SK : 土坑 SD : 溝

## 本文目次

I	遺跡の位置と環境	
1.	地理的環境	1
2.	歴史的環境	2
II	調査の概要	
1.	調査に至る経緯	3
2.	発掘調査の概要	4
III	遺構と遺物	
1	概要	5
2	層序	6
3	遺構と遺物	8
IV	結語	15
	報告書抄録	

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	横屋・宮ノ前遺跡と周辺の遺跡(1/25000)	2
第3図	調査区の位置(1/500)	5
第4図	調査区全体図	7
第5図	調査区地層断面図	8
第6図	遺構平面図・断面図(1)	10
第7図	遺構平面図・断面図(2)	11
第8図	出土遺物	13

## 表目次

第1表	横屋・宮ノ前遺跡調査一覧	4
-----	--------------	---

## 写真目次

写真1	横屋・宮ノ前遺跡周辺の景観	3
写真2	調査区全景(東から)	6
写真3	調査区全景(西から)と東壁断面	8
写真4	土坑3断面	12
写真5	土坑3完掘状況	12
写真6	土坑4完掘状況	12
写真7	土坑6断面	12
写真8	土坑6完掘状況	12
写真9	柱穴6断面	12
写真10	溝1完掘状況	12
写真11	溝1断面	12
写真12	出土遺物	14



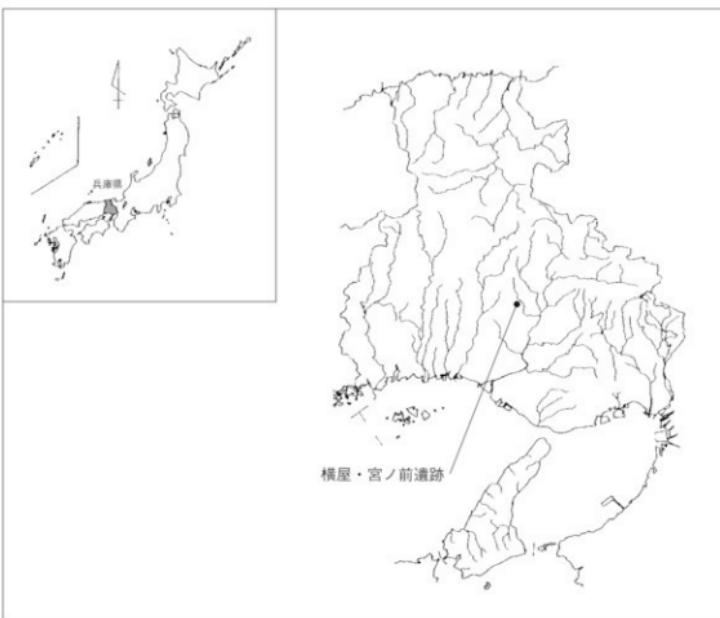
## I 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

横屋・宮ノ前遺跡は、兵庫県多可郡多可町八千代区に所在する。遺跡が所在する多可町は、兵庫県中部のやや東寄りに位置しており、800~1,000 m前後の山塊が連なる中国山地帯に位置している。北は丹波市、朝来市、東は丹波市、南は西脇市、加西市、西は神崎郡神河町、市川町にそれぞれ接しており、直線距離で神戸まで約45 km、大阪まで70 kmを測る。町域の80%を山林が占めていることでも明らかのように、平地の割合は小さく、山塊を縫って、多数の加古川支流が合流しつつ、概ね北から南へと流下している。

横屋・宮ノ前遺跡は、加古川の支流である野間川右岸に位置する。野間川は、笠形山(939 m)、入相山(780 m)に発し、多可町中央部を流下して、西脇市内で加古川に合流する。遺跡は、西方の山塊から流下する小河川が、野間川に合流する地点の北西側にあり、この小河川が形成した扇状地上に立地している。この扇状地は、西から東へ標高を下げるごく緩やかな傾斜を見せており、末端部は野間川に面して低いながら段化している。調査地の標高は144 m前後を測る。

野間川上流域では、平地(沖積平野)はごく狭いが、横屋・宮ノ前遺跡より上流側2 kmほどからようやく平地が開け、遺跡周辺での平地の幅は400 m前後となる。

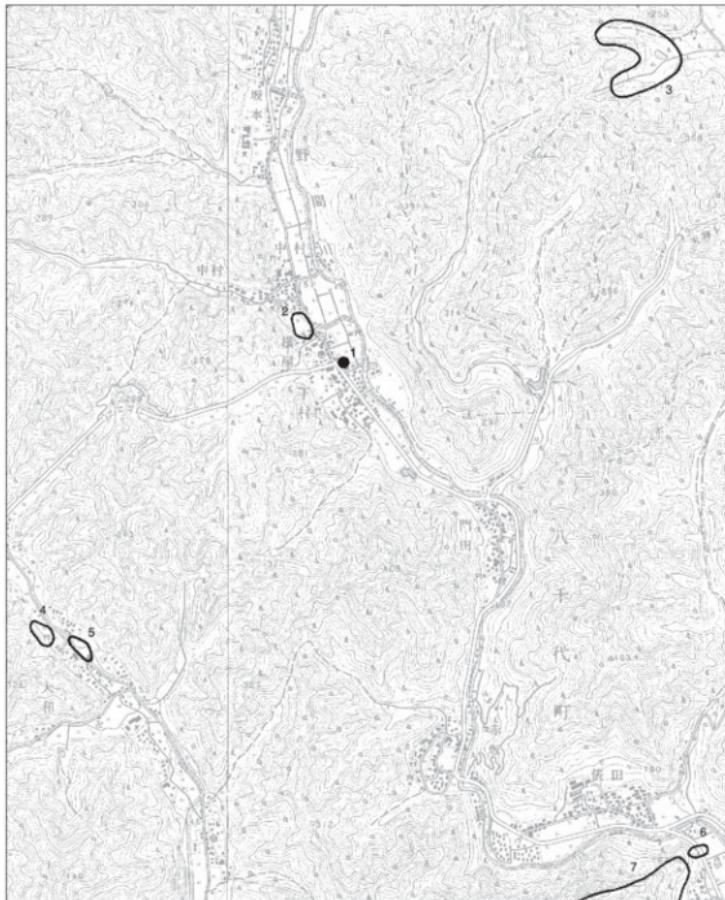


第1図 遺跡の位置

## 2. 歴史的環境

横屋・宮ノ前遺跡の周辺の野間川上流域では、これまでに知られている遺跡はごくわずかである。

本遺跡以外では、横屋・寺ノ下遺跡（2：弥生時代・集落遺跡）が知られているほかは、2.5 km上流に大屋・松ノ本遺跡（中世・集落遺跡）があるにすぎない（兵庫県教育委員会 2011）。これは、本地域



第2図 周辺の遺跡分布（国土地理院1/25000「栗賀町」・「中村町」より作成）

- 1 横屋・宮ノ前遺跡    2 横屋・寺ノ下遺跡    3 中野間・岡崎遺跡    4 極楽寺遺跡群    5 道脇寺遺跡    6 野間山城跡  
7 徳畠・宮ノ内遺跡

での開発行為が少なかったことによる、調査機会の僅少さを反映している可能性もあるが、やはり、野間川上流域の平野が狭隘で、生産性が低かったことに起因する点が大であろう。

横屋・宮ノ前遺跡から3kmほど下流になると、野間川流域にやや広い平野が開け、平安時代～中世の集落跡である中野間・山口遺跡、中世の集落遺跡である中野間・岡崎遺跡（3）、光童寺池北遺跡をはじめ、大規模な中世寺院遺跡である極楽寺遺跡群（4）、同じく中世寺院跡である道脇寺遺跡（5）が見られるようになる。また、野間山城跡（6）、光童寺山城跡など、中世の山城跡も分布している。

また、同じ加古川支流ではあるが、野間川とは流域（谷）を異にする地域では、仕出原川上流域の徳畠・宮ノ内遺跡（7）、徳畠遺跡、徳畠・楊谷遺跡、大和川流域の楊柳寺遺跡群、中三原・宮垣内遺跡、中三原・登り垣内遺跡など、いずれの遺跡も中世に属するものである。

中世におけるこのような遺跡の増加は、この時期、野間川沿いの開墾が進展したことを示しているものと推量される。

参考文献 兵庫県教育委員会 2011 『兵庫県遺跡分布地図』



写真1 横屋・宮ノ前遺跡周辺の景観

## II 調査の概要

### 1. 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、兵庫県北播磨県民局加東土木事務所多可事業所が実施する、(一) 加美八千代線県単独道路改良事業に先立つものである。兵庫県教育委員会では、平成 20(2008) 年度に、同事業所の依頼に基づいて事業対象地の確認調査を実施した。この確認調査で、遺構・遺物が存在することが明らかとなったため、当該範囲を対象として平成 21(2009) 年度に本発掘調査を実施した。

調査年度	調査番号	調査種別	調査期間	担当者	調査面積 (m <sup>2</sup> )
2008	2008219	確認調査	2009/1/21	山本 誠	8
2009	2009154	本発掘調査	2009/5/13~2009/7/4	久保弘幸・上田健太郎	294

第1表 (一) 加美八千代線県単独道路改良事業関連横屋・宮ノ前遺跡調査一覧

### 2. 発掘調査の概要

#### (1) 確認調査

確認調査は、上記事業地を対象として実施した。調査は、2 m × 2 m の調査区 2 か所を設定して実施した。調査体制は以下のとおりである。

##### 【調査の体制】

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

企画調整班 山本 誠

確認調査の結果、調査区のうち 1 か所で遺構・遺物が検出された。この結果、確認調査対象地の 294 m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要と判断された。

#### (2) 本発掘調査

##### 【調査の体制】

平成 21(2009) 年度の調査

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

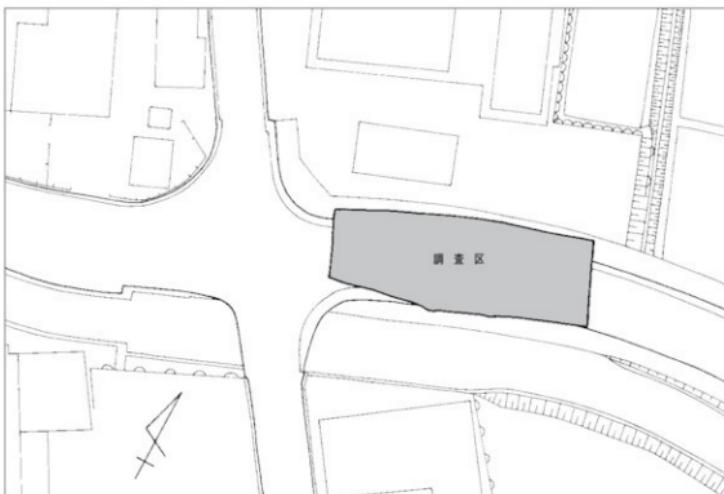
発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

調査第 1 班 久保弘幸・上田健太郎

##### 【調査の方法と成果の概要】

事業予定地はほぼ東西に延びてあり、そのうち調査区は延長 27 m、幅 9 m を測る。調査は、重機による表土掘削の後、遺物包含層以下を人力により掘削し、遺構検出作業を実施した。遺構面の図化は調査担当者がおこない、あわせて写真撮影も実施した。なお、世界測地系に基づく調査地点の座標値は、第 4 図内に示している。

調査の結果、柱穴、土坑、溝等が検出された。ただし、遺構内からの出土遺物がきわめて僅少であったことと、包含層内の遺物もきわめて散漫であり、調査区付近は、集落遺跡の縁辺部と判断された。



第3図 調査区の位置 (1/500)

### 3. 整理事業の概要

整理事業は、平成23(2011)年度に、兵庫県立考古博物館において実施した。整理事業は久保の担当の下、考古博物館埋蔵文化財調査部整理保存課がこれを主管し、非常勤嘱託員が各作業を担当した。金属器の保存処理については、すべて考古博物館において実施した。また、本書に収録した遺物写真については、(株)地域文化財研究所に委託して撮影を実施した。

整理作業を担当した非常勤嘱託員は、下記のとおりである(順不同)

三好綾子 宮田麻子 柏木朗子

### III 遺構と遺物

#### 1. 概要

横屋・宮ノ前遺跡の調査区は、幅約9m、延長約27mを測る。本発掘調査は平成21(2009)年度に実施した。調査は、表土以下包含層までを重機によって掘削し、包含層以下を人力によって調査した。調査の図化記録は各年度の担当者があこない、あわせて写真撮影も実施した。

調査地は扇状地の先端部に近い、東に向かって緩やかに下がる斜面で、その東端部には野間川による低い段丘崖が観察される。西側は200mにわたって傾斜面が続き、山塊に至る。南側は野間川に流下する小河川に接し、北側は、なお扇状地の緩斜面が150mにわたって続く。

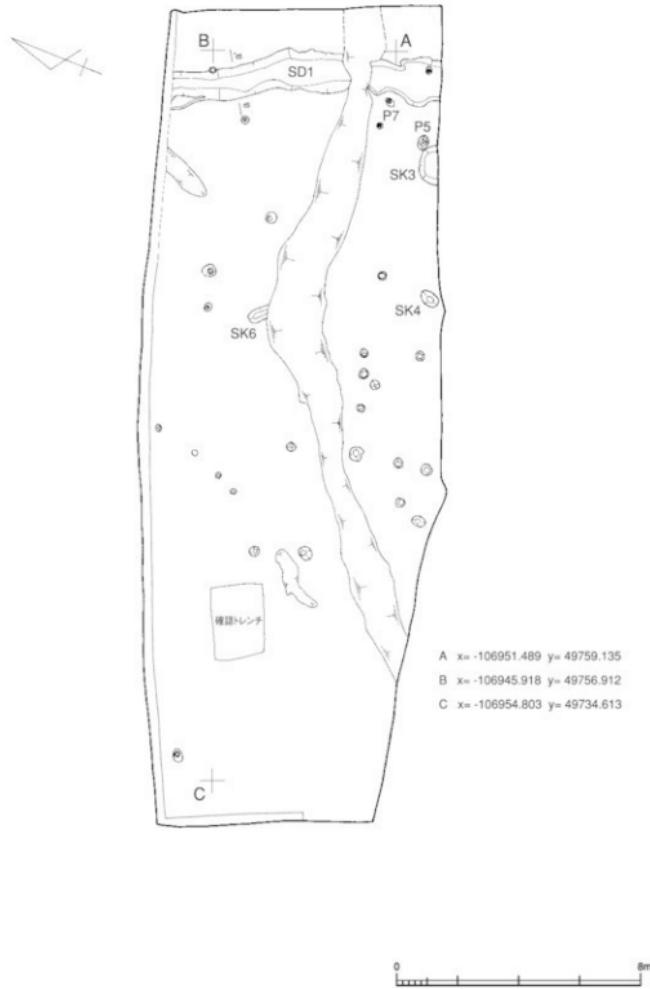
現在の地形と河川の位置から推定するならば、横屋・宮ノ前遺跡の中枢部は、調査地の北西側にあるものと推定される。

調査の結果、柱穴・土坑・溝のほか、洪水による溝状の砂礫堆が検出され、遺物包含層からは弥生土器の細片、奈良時代後期～平安時代前期にあたると思われる須恵器、土師器、近世の陶磁器類等が出土した(第5図)。また一部の遺構内からは、ごくわずかであるが、弥生土器(あるいは土師器)の細片が出土した。遺構の分布状況に企画性は看取されず、密度も一般的な集落と比較して低い。

また、調査初期の過程で柱穴あるいは土坑としたものの中に、その後の断面調査によって樹根あるいは倒木痕と判断されたものが多数存在した。第5図では、最終的に遺構と判断したもののみを図示しているため、調査区全景写真で見られる遺構(白線で表示)よりも、遺構数は少なくなっている。



写真2 調査区全景(東から)



第4図 調査区平面図

## 2. 層序

調査地は、住宅兼工場として利用されてきた場所であったため、厚い盛土があり、以下に旧表土（耕土）、上下2層に区分される黒色砂質シルト層（古土壤=遺物包含層）、黄褐色シルト層（第15層：いわゆる地山）と続き、その下位には扇状地の骨格をなす、亜角礫主体の硬化した砂礫層がある。

遺物包含層は、標高の高い調査地西側では削平を受けて消失していた。調査区中央部から東部にかけては、ほぼ地山の黄褐色シルト層の傾斜に沿って堆積していた。

堆積の厚い調査区東側では、遺物包含層より上部の旧表土部分が細分され（第1～8層・第16層等）、この間に多数の溝の重複が観察されたが、それらは近世～近代に属するものと思われる。

なお、地山の黄褐色シルト層中には、拡散してはいるものの、肉眼で識別できる程度の火山ガラスが含有されていた。この火山ガラスについては、遺跡に直接関連しなかったため同定はおこなっていないが、筆者が低倍率の顕微鏡を用いて検鏡したところ、バブルウォール形の透明ガラスのみが認められた。

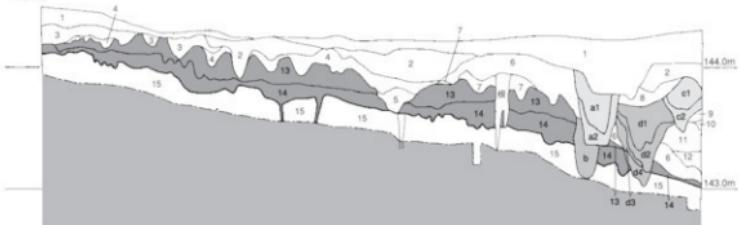
本地域において、火山ガラスを主体とした火山灰で顯著なものには、姶良Tn火山灰、および鬼界アカホヤ火山灰が代表的であり、ガラスの包含位置からみても、両者のいずれかに相当している可能性が高いだろう。

この下位が亜角礫を主体とする硬化した砂礫層で、扇状地の骨格をなす堆積物と考えられる。



写真3 調査区全景（西から）と東壁断面

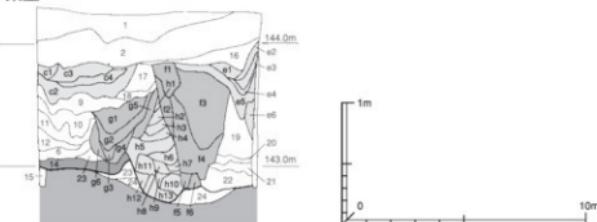
## 北壁



## 調査区北壁・東壁

1. 黄土(砂土)			
2. 10YR 4/4 緑褐色	植被紗—細紗	部分的に直径10cm以下の礫を密に含む	直徑1.5m以下で礫を含む古土壤層(古土壤上部)
3. 10YR 3/4 緑褐色	植被紗—細紗 小礫混じり		直徑2.0m以下で礫を含む古土壤層(古土壤下部)
4. 10YR 3/4 緑褐色	植被紗—細紗 中等混じり		透視地出露を示す古土壤層(古土壤)
5. 10YR 3/3 緑褐色	植被紗—小礫		1.5m以下で
6. 10YR 4/2 灰黃褐色	シルト—種粗紗		1.5m以下で
7. 10YR 4/3 にい・黄褐色	植被紗—細紗		1.5m以下で
8. 10YR 4/4 緑褐色	植被紗		1.5m以下で
9. 10YR 4/4 緑褐色	植被紗	部分的に直径3cm以下の礫を密に含む	1.5m以下で
10. 10YR 3/4 緑褐色	剥む一粒紗		1.5m以下で
11. 10YR 4/4 緑褐色	剥む一粒紗		1.5m以下で
12. 10YR 3/5 緑褐色	剥む一粒紗		1.5m以下で
13. 10YR 3/2 黄褐色	シルト—種粗紗		1.5m以下で
14. 10YR 3/1 黄褐色	シルト—種粗紗		1.5m以下で
15. 10YR 5/4 緑褐色	粒質シルト		1.5m以下で
16. 10YR 5/4 細粒褐色	粒質細紗		1.5m以下で
17. 10YR 5/3 にい・黄褐色	粒紗—中粒		1.5m以下で
18. 10YR 5/4 にい・黄褐色	粒紗—中粒		1.5m以下で
19. 10YR 4/2 反復成層	中粒—中粒		1.5m以下で
20. 10YR 4/2 反復成層	粒紗—中粒		1.5m以下で
21. 10YR 4/4 緑褐色	中粒—粒紗		1.5m以下で
22. 10YR 4/3 にい・黄褐色	粒紗		1.5m以下で
23. 10YR 5/3 にい・黄褐色	シルト質粗紗—細紗		1.5m以下で
24. 10YR 4/1 緑褐色	粒紗		1.5m以下で

## 東壁



a. 近代の厚土			
a1. 10YR 4/2 灰黃褐色	シルト質粗紗—細紗	近代の厚土	
a2. 10YR 4/1.5 灰黃褐色	粗砂混じる粗紗—細紗	近代の厚土	
b. 10YR 5/3 にい・黄褐色	シルト質粗紗—細紗	礫山中縫以下 SD-1の厚土	
c. 近代の厚土			
c1. 10YR 6/3 にい・黄褐色	種粗紗—細紗	礫山中縫以下	礫山中縫以下
c2. 10YR 5/3 にい・黄褐色	小礫混じる種粗紗		マトリックスは砂
c3. 2.5Y 4/2 灰黃褐色	シルト—種粗紗		マトリックスは砂
c4. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色	細紗—細紗	礫山中縫以下	マトリックスは風化の悪い砂
d. 近世—近代の厚土			
d1. 7.5Y 4/4 黄色	種粗紗	直径10cm以下の礫を密に含む	礫山中縫以下
d2. 10YR 4/3 にい・黄褐色	小粒一粒粗紗(粗砂)		小礫混じる
d3. 10YR 5/4 にい・黄褐色	種粗紗—細紗	小砂混じり	小礫混じる
d4. 7.5Y 4/1 黄色	種粗紗		小礫混じる
e. 近世—近代の厚土			
e1. 10YR 4/2 反復成層	種粗紗—細紗	直径1m以下の礫を含む	風化の悪い砂層
e2. 10YR 4/3 黄褐色	シルト質粗紗—細紗	直径1m以下の礫を含む	小礫混じる 風化の悪い砂層
e3. 10YR 3/3 緑褐色	種粗紗—細紗	直径1m以下の礫を含む	種粗紗—細紗
e4. 10YR 4/2 反復成層	シルト質粗紗—細紗	直径2m以下の礫を含む	風化の悪い砂層
e5. 10YR 4/4 黄褐色	シルト質粗紗—細紗	直径2m以下の礫を含む	小礫混じる
e6. 10YR 4/2 黄褐色	シルト質粗紗—細紗	直径3m以下の礫を含む	風化の悪い砂層

第5図 調査区北・東壁地層断面図

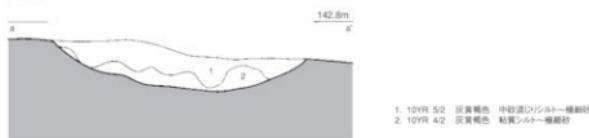
### 3. 遺構と遺物

柱穴・土坑・溝等が遺構として検出された（第5図）。ただし後述するところ、柱穴の一部は自然為による偽遺構の可能性がある。以下では、遺構種別ごとに記載を進める。なお、本調査では、すべての遺構について連続する番号を与えていた。

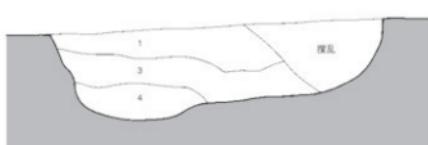
#### (1) 土坑

今回の調査では合計5基が検出されたが、そのうち土坑2としたものは、調査の結果人為的遺構と判断することができなかったので、本項では記載しない。

SD1



SK3



1. 10YR 5/4 に深い黄褐色 シルト質粘細砂→細砂  
2. 10YR 3/2 黄褐色 シルト→細砂 10YR 4/2 反黄褐色 シルト質粘細砂(油山)をブロック状に含む  
3. 10YR 4/2 反黄褐色 黏質シルト→細砂 10YR 4/2 反黄褐色 シルト質粘細砂(油山)をブロック状に含む  
4. 10YR 4/3 に深い黄褐色 シルト質粘細砂→細砂 10YR 4/2 反黄褐色 シルト質粘細砂(油山)をブロック状に含む



第5図 遺構平面・断面図(1)

### 【土坑3】(第6・8図)

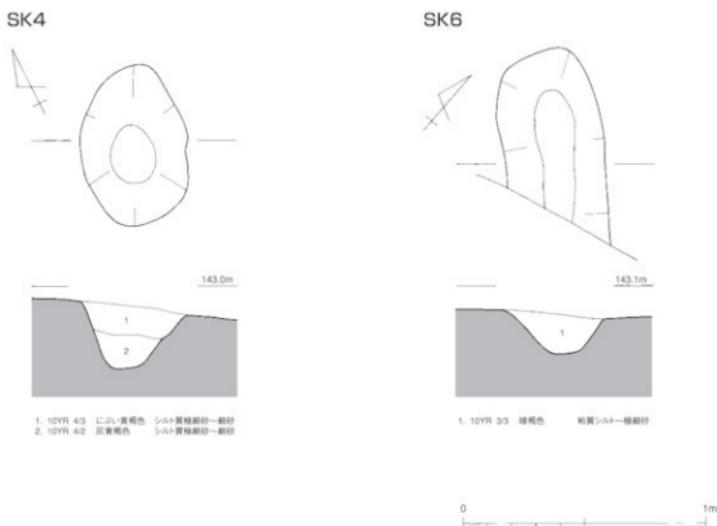
調査区東部南端に位置する土坑で、南半部は調査区外へ続く。調査区内での規模は、長径 110 cm、短径 60 cm、深さ 36 cmを測る。土坑内は細粒のシルトと砂で埋積されており、堆積状況からは自然埋没と考えられる。図化できない資料であるが、埋土下層より、弥生土器底部の断片が出土した。

### 【土坑4】(第7図)

調査区中央部に位置する不整橿円形の土坑で、長径 67 cm、短径 44 cm、深さ 30 cmを測る。土坑内は細粒のシルトと砂で埋積されており、堆積状況からは自然埋没と考えられる。遺物は出土しなかった。

### 【土坑6】(第7図)

調査区中央部に位置する土坑で、東半部は砂礫堆によって破壊されている。残存部は長径 80 cm、短径 44 cm、深さ 17 cmを測る。土坑内は細粒のシルトと砂で埋積されており、自然埋没の可能性がある。遺物は出土しなかった。



第7図 遺構平面・断面図(2)



写真4 土坑3断面



写真5 土坑3完掘状況



写真6 土坑4完掘状況



写真7 土坑6断面



写真8 土坑6完掘状況



写真9 柱穴6断面



写真10 溝1完掘状況



写真11 溝1断面



第8図 出土遺物

#### (2) 柱穴

今回の調査で、最も多く検出されたのが柱穴である。人為的な遺構か否かを判断し難かったものも含めて記載する。

既述のとおり、調査初期に柱穴と判断して掘り下げをおこなったものの中には、最終的な断面調査で、人為的な遺構ではないと判断されたものが存在したため、柱穴と判断されたものは合計 27 基であった。いずれも、遺構内は黒色シルト層で充填されており、一部の柱穴では、平面、断面で柱痕部が識別された。遺構内からの出土遺物はきわめて僅少で、わずかに柱穴 5 の柱痕部から弥生土器ないしは土器部と思われる細片が、柱穴 7 の上面付近で弥生土器の細片が出土したにとどまり、図示できるものはない。従って、大部分の柱穴は、積極的に時期を判断することができないが、埋土からみるならば、相互に大きな時期の懸隔があるものは含まれていないと判断される。

#### (3) 溝

調査区東端付近で、北西- 南北方向に延びる溝 1 条が検出された（溝 1）。遺構検出面の等高線にほぼ平行して延びることから、人為的に掘削された溝と判断される。最大幅 128 cm、深さ 20 cm を測る。溝内は細粒の砂ないしはシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。図示可能な遺物は出土しなかった。

#### (4) 砂礫堆

調査区を東西に縦断する砂礫堆が検出された。この砂礫堆は、調査区東壁断面の精査によると、現表土下面から形成されており、最大幅 2 m、深さ 80 cm の規模を見せる。きわめて短期的な洪水流による浸食・堆積の結果形成されたものと思われる。

礫は亜角礫が主体をなし、砂礫堆そのものからは遺物は出土しなかったが、層位的な点からみると近世末～近代に属するものと思われる。

(5) 包含層出土の遺物

包含層からは、須恵器・土師器のほか、近世の炮烙、磁器等が出土している。

第8図1は、須恵器杯蓋である。小破片であるが、平坦な天井部から、屈折して短くのびる端部を見せる。

2は須恵器杯身である。平坦な底部から、外上方に開いて直線的に立ち上がる口縁部を見せる。底面はヘラ切り無調整である。口径 14.2 cm、器高 3.3 cm を測る。

3は、弥生土器の底部であろう。風化のため器表面の調整は明瞭に観察できない。胎土には、径 1 mm 前後の砂粒を多く含んでいる。底径 5.1 cm を測る。

4は炮烙である。平坦な底部から屈曲してほぼ直立する口縁部を見せる。外面は広くスズをかぶっている。機械掘削時に包含層上部から出土しており、近世に属するものであろう。口径 34.3 cm、器高 4.8 cm を測る。

5は須恵器甕の体部破片である。外面には細かな平行タタキが施される。内面は同心円タタキを施した後、ナデ調整によってこれを消している。



写真 12 出土遺物

## IV 結 語

横屋・宮ノ前遺跡の今回の調査区は、遺構・遺物が僅少で、遺跡の規模や機能に関する評価は困難である。

まず、遺構の所属時期であるが、遺構内からの出土遺物がきわめて僅少であったため、判断し難いものが大部分である。遺構の埋土は、検出面上位に堆積した古土壤層（遺物包含層）とほぼ層相が同じであることから、古土壤層出土遺物の年代が参考になる可能性があるものの、推測の域を出ない。ただし、弥生土器片を出土した柱穴 5・7、土坑 3 については弥生時代（後期）に、相当する可能性がある。

ここでは、弥生時代後期または奈良時代～平安時代前期のいずれか、あるいはその双方に所属する遺構が混在している可能性を指摘するにとどめておく。

遺構群の性格についても、評価をおこなうことは難しい。

柱穴と判断された遺構は、いずれも規模が小さく、調査区内での分布は散漫で企画性が看取されないことから、掘立柱建物跡、あるいは竪穴住居跡のような、ある程度の耐用期間を有する構造物を構成するものとは考えにくい。あくまでも推測の域を出ないが、短期間の、きわめて簡易な構造物にともなうものと考えておきたい。

土坑についても、柱穴同様、機能を推定する資料に欠けている。

溝については、遺構検出面の等高線に平行して延びることから、人為的に掘削されたものであることは確実である。調査区東端の、扇状地先端部が段化する位置に近いことから、何らかの土地区画、あるいは耕作に伴う溝として設けられた可能性があろう。

砂礫堆は、調査区内をほぼ東西に延びる。隣接する、野間川に注ぐ小河川の洪水によってごく短期間に形成されたものである。砂礫堆は、古土壤層（遺物包含層）と、その上位に見られる近世の耕土層を浸食していることから、その形成は、近世末から近代にわたる時期のいずれかの時点であったと思われる。

今回の調査で出土した遺物は、近世のものを除くと、弥生時代後期と推定される土器の細片、奈良時代後期～平安時代前期と考えられる須恵器 2 点のほか、少数の中世前半期の須恵器に限られる。調査区と遺物量の制約から、あくまでも推定に過ぎないが、横屋・宮ノ前遺跡では、まず弥生時代後期に集落が形成され、それが廃絶した後、長期間にわたって人の活動の痕跡が途絶え、その後、奈良時代～平安時代前期になって、ふたたび集落が形成されたものであろう。それ以降、中世前半期にも集落が存在したものと思われるが、近世集落が成立するまでは、本遺跡周辺における人の活動は、ごく低調な状態が継続したものと思われる。

## 報告書抄録 (Outline of the Report)

ふりがな	よこや・みやのまえいせき		About the Report			
書名	横屋・宮ノ前遺跡		Excavation report of the Yokoya-Miyanomae archaeological site			
副書名	(一)加美八千代線県単独道路改良事業に伴う発掘調査		Report of the Archaeological Sites of Hyogo prefecture vol. 411			
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告		The Author/Editor : Hiroyuki Kubo			
シリーズ番号	第411冊					
編著者名	久保弘幸		Hyogo prefectural museum of Archaeology			
編集機関	兵庫県立考古博物館		Address : 1-1-1 Onaka, Harima-cho, Hyogo pref. Japan			
所在地	兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1					
発行年月日	2011(平成23)年12月28日		Publication : December 28, 2011			
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経		
よこや みやのまえいせき 横屋・宮ノ前遺跡	たかぐん たかちょう 多可郡多可町 やち ょく よこや 八千代区横屋	市町村	遺跡番号	northern latitude east longitude		
		28365	280023	35°02'05" 134°52'42"		
遺跡調査番号	調査の種別	調査期間		調査原因		
2009154	本発掘調査	2009年5月13日 ～ 2009年7月4日		(一)加美八千代線県単独道路改良事業		
遺跡の種別	集落遺跡	主な遺構		柱穴・溝・土坑		
遺跡の時代	弥生時代 平安時代 鎌倉時代	主な遺物		弥生土器・須恵器・土師器		
要約	横屋・宮ノ前遺跡では、柱穴・溝等が検出された。遺構内からの遺物の出土は僅少であるが、一部の柱穴から、弥生土器の底部が出土した。遺物包含層(古土壤層)からは、弥生時代後期の土器のほか、奈良時代後期～平安時代前期の須恵器、中世前半期の須恵器がきわめて散漫に出土した。こうした状況から、調査地点は、遺物が示す各時代に形成された集落の縁辺にあたると思われる。					
Abstract	In the Yokoya-Miyanomae archaeological site, we found pits that belong Yayoi period and late Nara and early Heian period. The other features did not have any relics. From the layer of the site, we got a few Sue wares that belongs late Nara or early Heian period and early Kamakura period.					
Address of the site	Yachiyo, Taka, Hyogo pref. Japan		Date of the Excavation	13, May ~04, July 2009		
Category	Settlement		Archaeological Features	Pits, Gutters,		
Period	Yayoi Period, late Nara～early Heian Period, Kamakura Period		Main Relics	Yayoi pots, Sue wares, Haji wares		

多可郡多可町

横屋・宮ノ前遺跡

(一) 加美八千代線県単独道路改良事業に伴う発掘調査

2011(平成23)年12月28日発行

編 集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

發 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 株邦榮堂

〒675-2213 兵庫県加西市西笠原町766

